

2023. 2. 26 (日) 出エジプト 1 : 15 ~ 22

1:15 また、エジプトの王は、ヘブル人の助産婦たちに命じた。一人の名はシフラ、もう一人の名はプアであった。

1:16 彼は言った。「ヘブル人の女の出産を助けるとき、産み台の上を見て、もし男の子なら、殺さなければならない。女の子なら、生かしておけ。」

1:17 しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにしないで、男の子を生かしておいた。

1:18 そこで、エジプトの王はその助産婦たちを呼んで言った。「なぜこのようなことをして、男の子を生かしておいたのか。」

1:19 助産婦たちはファラオに答えた。「ヘブル人の女はエジプト人の女とは違います。彼女たちは元気で、助産婦が行く前に産んでしまうのです。」

1:20 神はこの助産婦たちに良くしてくださった。そのため、この民は増えて非常に強くなった。

1:21 助産婦たちは神を恐れたので、神は彼女たちの家を栄えさせた。

1:22 ファラオは自分のすべての民に次のように命じた。「生まれた男の子はみな、ナイル川に投げ込まなければならない。女の子はみな、生かしておかななければならない。」

<説教>

先主日にはステパノがモーセについて出エジプト記に基づいて語り始めたところを聞き学びました。彼はこう始めました。〈さて、神がアブラハムになされた約束の時が近づくにしたがい、民はエジプトで大いに数が増え、ヨセフのことを知らない別の王がエジプトに起こる時まで続きました。この王は、私たちの同胞に対して策略をめぐらし、私たちの先祖たちを苦しめて幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました。モーセが生まれたのは、このような時でした。〉(7:17-20a)と。これは出エジプト記では1章7節から22節に当たる部分です。この出エジプト記の箇所の中に、やはり私たちが今日目を留めておくべき大切なことがあると思うので、本日はそれを学びます。

〈ヨセフのことを知らない〉とはヨセフの功績を知らないというだけではなく、ヨセフを恵み導き、ヨセフが信じ従った真の神を知らないということでもあったでしょう。このエジプト王が第一に考えたことは〈戦い(戦争)〉(出エジプト 1:10)のことでした。いざ戦争になった時にイスラエルの民がエジプトにとって得で有利なものか、損で不利なものか、そんなふうにはしか考えることができませんでした。要するに「人を人と思わない」、エジプトに都合の良い「駒」として使うことしか考えなかったのでしょう。ですからイスラエルの民の生活をどれだけ苦しいものにしても平気でした(1:8-14)。そして生まれた〈男の子〉を次々と殺すことさえ、自分たちエジプトの利益のためなら何でもありませんでした(14-15)。そんなエジプト王に逆らう者は誰もいないはずでした。

〈しかし、助産婦たちは神を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにしないで、男の子を生かしておいた。〉(17)のです。〈助産婦たちは神を恐れた〉(21)と繰り返し書かれています。なぜ彼女たちは、〈エジプトの王が命じたとおりにしないで、男の子を生かしておいた〉のか、それはただひとえに〈神を恐れた〉からです。その一方で、〈王の命令を

恐れなかったからです) (cf.ヘブル 11:23)。彼女たちは王よりも神を恐れました。王の命令に従って男の子を殺すことは、イスラエルの民を増やし強くなさろうとして、いのちを与え生まれさせておられる神に反逆し敵対することになると考えたのです。あれほど過酷な労働でエジプト王から苦しめられてもなお増え広がるのは神がそのようにしておられるのに違いないと考えたのでしょう。エジプト王より遙かに強い神の力と御意思を見ていたのでしょう。ですから、エジプト王に咎められても平然と答えました。「私たちヘブル人の女は、あなたがたエジプト人の女より元気で強いのです。」と。「この違いのうちにイスラエルの神のことが分かりませんか。」と言わんばかりのようにも聞こえます。もちろん、これは命懸けの言葉であり、行動でした。もし王の怒りを招けば殺されることは間違いありませんでした。今は奴隷としてエジプトから好き放題に使われている身分であり、この世の絶対的の最高権力者である強大なエジプト王からすれば全く小さな存在の彼女たちを殺すことなど簡単なことでした。しかし彼女たちは考えたのでしょう。「エジプト王の命令に従って男の子を殺せば王の怒りからは免れられるし、殺されずに済む。しかしそれでいのち拾いしたとしても、今度は天地万物の王なる神の怒りを免れることはできない。そもそも私たちの仕事は神がお与えになったいのちを生かすことであり、殺すことでは断じてない。生まれて来た子を助産婦が自分の手で殺すなどあり得ない。そんな神のみこころに反し、神に敵対することをしたら一生の後悔になる。ならば、神に従い、エジプト王に従わずに殺されたとしても、それで自分の人生を全うしたことになる。何よりそれで神が喜んでくださる。神は私たちに必ず良くしてくくださる。」と覚悟をしたのでしょう。

〈神はこの助産婦たちに良くしてく下さった〉(20)のです。不思議なことに彼女たちは殺されませんでした。神がエジプト王の心を支配してく下さったに違いありません。彼女たちはますますその仕事に精を出し、イスラエルの民は〈増えて非常に強くな〉りました。それで、ますます彼女たちは〈神を怖れた〉(21)のです。〈神は彼女たちの家を栄えさせ〉てくださいました。

「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従うほうが、神の御前に正しいかどうか、判断してください。」(使徒 4:19)、「人に従うより、神に従うべきです。」(使徒 5:29)と言う使徒ペテロの証言をもう聞いてきました。その使徒ペテロは確かにこうも言いました「人が立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、あるいは、悪を行う者を罰して善を行う者をほめるために、王から遣わされた総督であっても、従いなさい。」(I ペテロ 2:13-14) これらペテロの言葉からわかることは、私たちはできる限りこの世の(世俗の)権力に従うべきです。しかし、ペテロたちが(そしてステパノが)直面したように、その権力ある者だから神のみこころに、神の法に反することを命令された場合には、そんな権力者に従ってはなりません。不服従しなければなりません。そうやって人間である権力者にではなく神に従うのです。それで権力者を怒らせ、何か不利益を被ることがあったとしても、それは神を怒らせることと比べたら比べものにならないくらい小さなことです。この世の権力者に従うのは、その権力者の更の上に上におられる〈主のゆえに〉従うのです。使徒ペテロは更に言っています「自由な者として、しかもその自由を悪の言い訳にせず、神のしもべとして従いなさい。」(I ペテロ 2:16) やはり従うのは〈神のしもべとして〉です。ですから主である神のみこころに反することには、(神のしもべとして)は従えない、従ってならないことは明らかです。それで権力者が

怒り、なぜ従わないのかと聞いてきたときこそ、神のみこころを証しし、主を証しし、神の栄光を現す絶好の機会となるのです。

ヘブル人の助産婦たちも、エジプト王より遙かに勝って神を恐れ、エジプト王のしもべ（奴隷）である以上に、〈神のしもべとして〉考え、行動したのです。彼女たちはあのこの世の強大な絶対的権威であるエジプト王に対して、完全に自由に〈神のしもべとして〉神に従い、王には従いませんでした。先日、11日は「信教の自由を守る日」でした。「信教の自由」とは（思想及び良心の自由も同じですが）、私たちキリスト者としては、国家権力が定める、または国家権力が肩入れする特定の宗教（や思想）に従ってそれに基づく行為を行うよう私たちに命令・強制してくる国家権力に対して、またはそういう国家権力から、私たちはキリスト者として、個人としてまた教会としても自由なのだ、ということです。つまり国家権力がどんな命令を私たちにしてきたとしても、それに対して従うか従わないかは、どこまでも徹頭徹尾、キリスト者としての信仰に基づいて、みことばと聖霊によって導かれ清められた信仰の良心に従って考え、行動すべきなのです。お国の言うことだからと、もう法律で決まってしまったことだからと、へいへいと何も考えずに無条件で従うこのではありません。お国の言うことが神の法に、みこころにかなっているかどうか、よく見定めなければなりません。私たちは神だけを恐れなければなりません。神をあなどってはなりません。そうすれば神が私たちに必ず良くしてくださいます。問題は神のしもべである私たちの神に対する信仰の従順なのです。